

佐久間象山と魏源

新村 容子*

はじめに

佐久間象山の随筆『省警録』(安政元年、1854)中に、魏源『聖武記』(道光二十二年、1842)に言及している有名な一節がある⁽¹⁾。

先公は相台に登り、嗣ぎて防海のことを管せり。時に英夷は清国に寇し、声勢相逮べり。予、時事に感慨し、上書して策を陳べたり。実に天保壬寅十一月なりき。後に清の魏源の聖武記を觀るに、また時事に感慨するによりて著はすところにして、その書の序は、またこの歳の七月に作られたれば、すなわち予の上書に先だつこと屢かに四月のみにして、しかもその論ずるところも、往々約せずして同じきものあり。ああ、予と魏とは、おのおの異域に生れ、姓名を相識らざるに、時に感じて言を著はすは同じくこの歳にありて、その見るところも、また闇号するものあるは、一に何ぞ奇なるや。真に海外の同志といふべし。

アヘン戦争直後の天保十三年(1842)十一月、象山は、海防係を命ぜられた松代藩主・老中真田幸貫に「海防に関する藩主宛上書」を上書した。のちに魏源『聖武記』を読むと、『聖武記』もまた同じ歳にアヘン戦争の衝撃のもとに起草され、しかもその主張に「約せずして同じき」部分が合った、というのである。象山は魏源を「海外の同志」と呼んで魏源への共感を表明している⁽²⁾。

魏源『聖武記』は、清朝歴代の皇帝の軍功を記した清朝通史である。それは、魏源『海国図志』の五十巻本と同じ歳に刊行されたが、『海国図志』よりも一足早く弘化二年(1845年)に日本列島にもたらされた⁽³⁾。佐久間象山は、嘉永二年(1849)十月にハルマ辞書の出版許可を得るために上京し安政元年(1854)まで江戸に滞在した。『省警録』によれば、江戸に滞在していた期間に象山は初めて『聖武記』を読んだという。

『聖武記』は当時の日本人に歓迎され次々と翻刻された。清朝通史のどこが当時の日本人に訴えかけたのであろうか。塩谷宕陰は『聖武記』を読んだ感想を次のように述べている⁽⁴⁾。

予、嚮者魏黙深の聖武記を読み、以謂らく、此れ魏氏の懲毖録なりと。道光の鴉片の乱は、殆ど朝鮮壬辰の事と類す。而して黙深の忠慨義憤は、柳成竜に十倍せり。是に於いて、前に懲りて後を毖むの意を述べて以て世を徹めんと欲す。然れども敗事を挙ぐるは謗を揚ぐるに近く、頗る立言するに難き者有り。故に首に祖宗の豊功偉烈を紀し、然る後に武事の余記

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

に及ぶ。曰ふが如く、今能く祖宗を師とすれば、則ち後を善くするに於いてか何ぞ有らん。

而して後を善くするの方は余記に寓せり。体を立つるの宜しきを得る者と謂ふ可きなり。

塩谷容陰は、『聖武記』はアヘン戦争の敗北に「懲りて後を毖む」目的で執筆されたものであり、その目的は「武事余記」に記されている、と認識している。『聖武記』全十四巻の内、十一巻から十四巻は「武事余記」としてまとめられ、戦法、軍政、軍費などについて総合的に論じたものである。そこでは、極めて断片的ではあるが「西夷」すなわちイギリスにも言及している。『聖武記』渡来後、幕末日本で作られた何種類かの和刻本は、神田信夫によれば、「武事余記」を中心としたものであるという⁽⁵⁾。当時の日本は、たとえ断片的な情報であってもアヘン戦争情報を渴望していたのであろう。

本稿の目的は、魏源『聖武記』と佐久間象山「海防に関する藩主宛上書」とを比較検討し、象山の言う「約せずして同じき」議論とは具体的に何かについて考察することである。

『聖武記』の版本について言及しておく。佐久間象山が読んだ『聖武記』は、「その書の序は、またこの歳の七月に作られたれば」とあることから、道光二十二年序刊の古微堂刊本であることがわかる。『聖武記』は続けて道光二十四年に重訂本、道光二十六年に三次重訂本が出された。道光二十四年本には、巻四、巻六、巻七、巻十に加筆があり、巻五と巻六の記述に変更が加えられている。道光二十六年本は、付録部分において更に変更と加筆が見られ、新たに姚瑩『康輶紀行』の一段落が付け加えられた。但し、「武事余記」に関しては、三つの版本に内容上大きな差はないという⁽⁶⁾。本稿では、道光二十二年本をもとに、興亜院政務部による和訳本（1943年刊、道光二十六年本に依拠している）を参考にした⁽⁷⁾。

1. イギリス観 -- 佐久間象山と魏源 --

アヘン戦争の敗北に衝撃を受けて書かれたと言われている魏源『聖武記』、とりわけその中の「武事余記」においてイギリスはどのように記述されているだろうか。『聖武記』巻十四に、イギリスの侵攻を倭寇と比較して論じた部分がある⁽⁸⁾。

紅夷の入寇するは、倭と同じからず。明史兵志に言ふ。倭寇は陸戦に長じて、水闘には短なり、船敵せずして火器備はらざるを以てなりと。紅夷は則ち専ら戦艦火器に長ず。此れ倭に異る者の一なり。倭は専ら沿海を剽掠し、迹流賊に同じ。紅夷は則ち皆富商大賈にして、剽掠を屑とせず、而して埠頭を索め、互市を通ずるに藉りて名と為し、専ら鴉片の煙、耶蘇の教を以て、華民を毒し、而して銀幣を耗せしむ。此れ倭に異る者の二なり。紅夷の水戦と火攻は、倭よりも強く、鴉片の害は倭よりも甚だし。日本の深く紅夷を悪んで通市を与えざるは、其鴉烟と邪教とを防ぐなり。紅夷の日本を畏れるは、其岸上の陸戦なり。日本三十六島、港汊紛岐す。其海口は更に中国より多く、其水戦火攻は尚中国に如かず。止だ陸戦の悍、守岸の巖を以て、遂に英夷を讐れしむるに足る。市舶を絶ちて而して敢えて過問せず。又、止

だ刑罰の断、号令の専なるを以て、遂に邪教を禁じ、鴉片を断つに足り、而して敢て軽犯するものなし。

倭寇と比較してのイギリスの特徴は次のようにとらえられている。第一に、イギリスは倭寇のように掠奪を事とすることはない。第二に、イギリスは交易を名目としてアヘンとキリスト教を中国に導入し害を与えている。第三に、イギリスは戦艦と火器にすぐれている。

上の文において、魏源は中国と日本を比較し、日本は「陸戦の悍、守岸の嚴」によってイギリスを畏れさせて交易を絶ち、キリスト教とアヘンを阻止している、と論じている。

同じく巻十四において、魏源はイギリスの侵攻は広東の兵が弱いことを知っていたからである、と次のように述べている⁽⁹⁾。

西夷の闖入せしは、粵兵の驚を習観するに由るなり。粵兵の驚は、糧薄にして、伍虚なるに由るなり。若し毎省、冗兵の餉額を汰去して、精兵の餉額に并せんとするに、姑く毎省六千を以て断と為し、別に沿海の驍鋭水陸各半を募り、澳、廈、寧波、吳淞番舶雲集の区に分布し、昼夜訓練し、水戦には則火器、火艇、風濤出没し、陸戦には則技芸節制、營壘森嚴ならしめ、西夷をして之を觀せしめ、安南日本守禦の畏る可きか如くならしめば、則ち、必ず閉關罷市を以て虞を為し、而して敢えて心を生せざるなり。

兵は数を減らして給与を厚くし精兵を募り、外国船の集まる港に精兵を配備し日夜訓練するならば、イギリスはこれを見て畏れて従順となり、「閉關罷市」、すなわち交易断絶という脅しをかけることによって制御できる、と論じている。

一方、佐久間象山「海防に関する藩主宛上書」は、清朝を打ち破ったイギリス軍が次には日本に侵攻してくる可能性が高いという緊迫した情勢認識のもとで書かれた海防策である。象山のイギリス観はいかなるものだったか。

象山はイギリスの日本への野心はあくまで交易にあるととらえている。

莫大之交易を求め、終に本邦の膏腴を吸取り国力を弱め、果ては属国の如きものにも可仕内存に可有之候⁽¹⁰⁾。

また、イギリスは、自己の利益となると判断すれば、「聊か我に怨みなくとも、如何様の暴虐をも可仕候」存在であり、「兵端を開き本邦を憊らす存在と認識されている。イギリスは「唯利にのみかしこ」く、職業的兵士を備えるイギリスにとって戦争は「其身の利潤と相成」故に「戦争を好み候」存在として認識されている⁽¹¹⁾。

日本の防備体制については、象山は、

是迄水軍の御習はせも無之、固より船軍は本邦の不得手なる事にて、彼れの尤も長じ候所に候へば、兵法に所謂以勝予敵と申ものにて、必敗の道に可有之候。よしや、其節敢死之士多分有之候て決戦仕候とも、ただあたら御人を損じ候迄にて、勝利之義は万々無覚束奉存候。去ればとて、此の節大島に御備場を被建、多くの御人数を被差置候とも、是迄の御趣法にて

は、只多分の御入料の費へ候のみにて、何の御役にも相立申間敷奉存候⁽¹²⁾とある如く、勝れたイギリスの海軍に比して日本の海防体制の不備を指摘し、急速準備されている備場の建設にもその効果に疑問を投げかけている。

魏源と佐久間象山の主張を比較してみると、交易についての認識と、イギリスに対する防御の方法において、両者に相違があることがわかる。交易については、象山は日本の国力を奪うものであると恐れている。しかし、魏源は交易についてはむしろ中国がイギリスを制御する手段とみなしている。イギリスに「閉關罷市」を宣告し交易を許さないという旧来からの懲罰方法が有効であると考えている⁽¹³⁾。

防御の方法について、佐久間象山は、大島における砲台建設などの、外国船の上陸を食い止める作戦に危惧を表明し、海上での戦いに不慣れな日本の状況の克服こそが早急の課題であると見なしている。それに対し、魏源は日本は「陸戦の悍、守岸の嚴」によって防御を固めイギリスを寄せ付けない、と高く評価している。つまり魏源は、「陸戦の悍、守岸の嚴」という守りの戦法によってイギリスを阻止できると考えていたことになるであろう。事実、魏源は「武事余記」においてイギリス船を海においてではなく中国の内河に侵入した地点で防ぐことを主張している。

海寇を禦ぐは、但だ内河を守るの法有りて、海面を守るの法なし。而して吳淞天津の砲台は近く内港を扼せず、皆遠く口門の外に置く。(中略)何ぞ諸を港内岸狭の處に移し、夷船をして外洋の横恣なるが如くなるを得せしめず……⁽¹⁴⁾。

魏源はまた別の箇所でも次のように述べている。

天下に城郭の国有り、游牧の国有り、舟楫の国有り。穹帳騎射、風馳雨驟、此游牧の長ずる所也。濤駛火攻、履危狎險、此舟楫の長ずる所也。深溝高壘、清野堅壁、此城郭の長ずる所なり。上世より以来中国は海防有りて海戦無し。(中略)皆僅かに師を海道に於いて済し、海中において交戦するに非ざるなり⁽¹⁵⁾。

舟楫の国であるイギリスは火攻水戦に勝れているが、城郭の国である中国は堅壁清野、すなわち敵の上陸を阻止するとともに侵入してきた敵の糧食を断つ戦法に勝れているという認識である。ここには、中国とイギリスの軍事的力量の格差についての危機意識はみられない。イギリスが「火攻水戦」に勝れていることは、特性としてとらえられている。中国には中国の特性があり、「清野之法を以て接済を断ち、堅壁之法を以て火攻を禦ぐ」戦法で対処すれば良いという認識であった。

この点に関連して、象山は『省警録』においてつぎのように述べている。

ただ魏は、上世より以来、中国に海防ありて海戦なしといひ、遂に壁を堅くし野を清くして、岸奸を杜絶するをもって、防海の家法となせり。予はすなわち盛んに砲・艦の術を講じて、邀撃の計をなし、駆逐防截してもって賊の死命を外海に制せんと欲す。これを異なれりとなすのみ⁽¹⁶⁾。

すなわち、象山は海戦力が必要であると考えていたのに対して、魏源は上陸してくる敵を堅壁清野という伝統的手法で滅ぼそうとしている、というのである。イギリスという敵の新しさと恐ろしさに対する認識において、佐久間象山と魏源とでは大きな断絶がある。それでは、佐久間象山と魏源に共通する主張とは何か。

2. 共通する主張 西洋式銃砲・軍艦の導入

佐久間象山「海防に関する藩主宛上書」(天保十三年十一月二十四日)と、魏源『聖武記』の「武事余記」とに共通する主張は、アヘン戦争という危機に直面し、西洋式の戦艦や軍器を早急に配備すべきであるというものである。

魏源は、「戦艦火器」に長じたイギリスに対抗するために、西洋の戦艦や鉄砲を購入すべき事を巻十四軍政篇の二カ所で指摘している。

其製(火砲の製造---筆者)は西夷より精なるは莫く其用は西夷より習うは莫し。其之を内地に製せんよりは之を外夷に購うに如かず。夷を以て夷を攻む上策権奇と為す⁽¹⁷⁾。

砲を造るは砲を購うに如かず、舟を造るは舟を購うに如かず。蓋し、中国の紅夷大砲は、本と仏蘭西より得たり、中国の有る所に非ざるなり。西洋各国の夷砲は、粵東に鬻く者有り、新嘉坡に鬻く者有り、孟邁、孟加臘に鬻く者有り、新嘉坡は澳を距る十程にして、専ら造砲出售の市有り、孟邁、孟加臘も亦然り、此れ皆中国の商船往来の地とす。但た毎船をして回帆入口せしむるに、必ず夷砲数位、或は十余位を購はしめ、官に繳して値を受く、力省にして器は精、事半にして功は倍するに足る。前年粵東は夷砲二百位を購ひ、重さ九千斤に至る者あり。惜しむらくは、款を主とし防を徹すれば遂に諸を虎門の洋に棄つ⁽¹⁸⁾。

西洋式の銃砲や戦艦を自前で建造するのではなく購入することを主張している。なぜなら、「力省にして器は精、事半にして功は倍する」からである。

戦艦の購入については次のように述べている。

火輪逆駛の舟に至ては、四夷哨探報信の利器と為す。苟も其本国専門の工匠に非ざれば、即ち出外の夷兵夷商も、亦之を用ひて而して其詳を知らず。砲傷礁損の過、甚だなるに遇ふ毎に、即ち之を修するも其法を得ず、断して未だ創造するに易からず。惟た粵に至れば、卸貨の夷には、船を併せて出售する者あり。其他の国の効順の夷にして仏蘭西、彌利堅の如きは、兵船を中国に售らん事を願ふ者あり⁽¹⁹⁾。

西洋の蒸気によって動く戦艦(火輪逆駛の舟)の建造は中国では困難であるので、広東で買い付けるか、フランスやアメリカから買い付ける事を提案している。

結論として次のように述べている。

彼の長技を以て、彼の長技を禦ぐ、此れ古より夷を以て夷を攻むるの上策なり。蓋し、夷砲、

夷船、但た精良を求めて、皆工本を惜まず。中国の官砲の戦船は、其工匠と監造の員と、惟た累を畏るるを知て、而して費を省けば、砲は則ち渣滓廢鉄を併せて爐に入れ、安んぞ震裂せざるを得んや。船は則ち脆薄窳朽にして、程に中らず、風濤に遇ふに足らず、安んぞ能く敵寇に遇はん。(以下略)⁽²⁰⁾。

粗悪な中国製の武器・軍艦に比して西洋製のそれらは精良で勝れた性能を持つことを指摘し、夷の勝れた武器によって夷を防ぐことは、古来からの「夷を以て夷を攻める」戦法である、と論じている。

他方、佐久間象山は次のように主張している。

戦艦此方の船大工に被仰付候ても、西洋の船を造り候書類種々渡来も仕居候よしに候へば、大抵には出来可仕候へども、先年露西亞の主ペートルの始めてその国にて海船を造り候節も、相応の材木に差支え工匠も事慣れず、一艘にも多分の費掛り候ひし様子に候へば、数艦を火急に御造立候には、余程の御物入も可有御座、且また、其様早急之義に参りかね可申候へば、先ず蘭人に被仰付、戦艦を式拾艘程も御買上げに被遊可然と奉存候。阿蘭陀領ジャガタラ辺に、多く海船を仕立候場所御座候由に承り候へば、日ならずして御用に相成可申候。戦艦之代料とて、尤も大小にも依可申候へども、通用之分は大抵五千両くらいのものにも候やの様子に、翻訳西洋書に見申候。左候へば、式拾艘御用仰付候ても、大略拾万両に可有御座候⁽²¹⁾。

すなわち、西洋式戦艦については最近日本にも技術書が伝来し、自前での戦艦の建造は可能である。但し、コストがかさむ上に早急には建造できない。オランダ人から買い上げるのが良い。戦艦20艘を買い上げる費用はおおよそ10万両くらいである、と述べている。

戦艦購入と同時に、象山はオランダ人を雇い、大型戦艦の操縦や測量の方法など船の運航に関する技術、船の建造の技術、大小鉄砲制作の技術を、旗本、ご家人、大名の家来などに習わせることを提言している。

さて又、阿蘭陀より水軍之法に鍛錬仕候もの、測量に長じ大船を扱い候もの等二十人、船大工十人、大小鉄砲を造り候職人、並に陸戦の陣法に習ひ候者各五人宛も彼招呼候て、御旗本衆・御家人之内を以て水軍数十隊を御拵み、右之水軍に鍛錬仕候者に教授被仰付、又船持ちの御大名方にも軍役の内にて人数を定め、家来のもの差出し其法を学ばせ候様被仰渡、船の制作は御大工の者に稽古被仰付、大船並びにバツテラ等の快船を数十百艘御造立有之、火器の造法は諸国より其人を選び其法を習わせ、許多の鉄砲を作り出し、陸戦守禦之法をば御旗本衆・御家人は勿論、諸大名方之家来にも、人を拵みて稽古仕候様に被仰付様仕度奉存候。先年阿蘭陀甲比丹より申出候には、一ヶ年二百金被下候はば、何に限らず、善き職人を連れ来可申段申候由にへば、四十人被招呼候ても、一ヶ年僅か八千両に有之候⁽²²⁾。

このようにして最新式の軍事技術を日本に移転し軍備を整えるならば、交易を無理強いするイギ

リスのたくらみを阻止することができる、と次のように述べる。

畢竟イギリスの本邦を覬覦仕候も、本邦の水軍に習はず、近來西洋にて盛んに用い候神妙の火器を不心得に候を、見込候ての事に御座候所、右之如く戦艦等御買上に相成り、又新規にも御造立、水軍をも御調練有之、火器をも御作り、西洋方の火術を専ら演習御座候趣、承り伝え候はば、武略に名誉御座候本邦の、元來短兵に長じ候上に、又己を捨て人に従ふの量を以て、水軍・火器は専ら西洋方を被用候知略・識量に感服仕、御武備の御嚴重なるに駭き候て、自然と覬覦の念を消し、要して交易を願ひ候はん等の奸謀、十に八、九は空しく相成可申候⁽²³⁾。日本はもともと武略に勝れ接近戦に長じている。その上に西洋式の武器・軍艦を装備するならば、イギリスは日本を侮れない存在と一目置くようになるであろう、と壮語している。

両者の主張は西洋式新式軍備の購入を主張している点で共通している。しかし、重要な相違がある。第一に、西洋式鉄砲については、象山は購入するのではなくオランダの鉄砲職人を雇い自前で製作する計画であり、西洋式戦艦については、購入と同時にオランダ人技術者を雇い建造技術を学ぶ事を主張している。しかし、魏源は戦艦は西洋人でさえも簡単には修理できないのだから建造は困難である、と中国自身での建造には否定的である⁽²⁴⁾。

魏源は科学に関してほとんど知識を持っていなかったようである。象山は『省警録』の中で、魏源の『海国図志』に収録されている銃砲説に次のような感想を述べている。

海防の要は砲と艦とにありて、砲は最も首に居れり。魏氏の海国図識の中に、銃砲の説を輯めたるは、類ねみな粗漏無稽にして、児童の戯嬉の為のごとし。おおよそ事は自からこれをなさずして、能くその要領を得るものはこれなし。魏の才識をもってしても、しかもこれをこれ察せざりき。今の世に当たりて、身に砲学なく、この謬妄を貽し、反って後生を誤りしは、吾、魏のために深くこれを惜しむ⁽²⁵⁾。

魏源が銃や砲の構造についての知識無くして銃砲を論じていることを深く嘆じている。西洋式砲術を江川英竜に学び、数学や物理学に造詣の深かった佐久間象山ならではの魏源評であろう。西洋の武器を生み出すことになった科学について、魏源は認識を欠いていたし、象山はそれこそが根本的に重要であると認識していた⁽²⁶⁾。

第二に、魏源は西洋式の戦艦・銃砲の導入について「夷の長技を以て夷を防ぐ」ととらえているのに対し、象山は「己を捨て人に従ふの量を以て、水軍・火器は専ら西洋方を被用候」というとらえ方をしている。西洋式軍備の導入は、佐久間象山にとっては「己を捨て」西洋の長所に従うという覚悟を要するものであった。華夷意識のとらえ直しが必要だったのである。ところが、魏源の場合は、「夷を以て夷を防ぐ」という古来からの華夷意識の枠組の中で西洋式軍器の導入をとらえている。

以上に考察した如く、佐久間象山と魏源とは西洋式の軍艦や砲を導入する必要性の主張において共通していた。しかし、象山がオランダ人技術者を介しての技術移転を構想していたのに対し、

魏源にはそのような発想は見られない。両者の相違は西洋の科学について認識の有無に根ざしているようである。また、西洋の軍備の導入は、象山に華夷意識のとらえ直しを迫るものであった。しかし魏源は華夷意識の枠組みの中でとらえている。

3. 共通する主張 外国書の翻訳

西洋の事情を把握するために、外国の書物を翻訳すべきであるという主張は、魏源と佐久間象山とに共通している。魏源は『聖武記』において次のように述べている。

近くは則ち西洋英吉利亦能く漢字を以て中国に通ず。夫れ外夷を制馭する者は、必ず先ず夷情を洞すべし。今粵東の番舶は、中国の書籍を購求して夷字に転譯す。故に能く尽く中華の情勢を識る。若し内地に亦館を粵東に設け、専ら夷書夷史を譯せば、則ち殊俗の敵情、虚実強弱、恩怨功取、曲折を瞭悉すれば、以て其の忌む所に中り、其の慕う所に投じ、駕馭において豈小補ならんや⁽²⁷⁾。

「館」を設立し、外国書・外国史を翻訳すれば、敵を制御するに役立つであろうという。

佐久間象山の「海防に関する藩主宛上書」は専ら軍事技術の導入に絞って論じており、上の魏源の主張に共通する論点は見られない。しかし、『省警録』に次のような記述がある。

夷俗を馭するは、先ず夷情を知るに如くはなく、夷情を知るは、先ず夷語に通ずるに如くはなし。ゆえに夷語に通ずるは、ただに彼を知るの階梯たるのみならずして、またこれ彼を馭するの先務なり。(中略)その江都にあるの日に、始めて魏氏の書を獲てこれを読みしに、また内地に学を設け、専ら夷書・夷史を訳し、敵情を瞭悉し、もって駕馭に補せんと欲せり。これまたその見の予と相符するものなり。ただ彼の国、今日能くその言を用ふるや否やを識らざるのみ⁽²⁸⁾。

象山は、嘉永二年(1849)にオランダ語辞書の出版許可を得るために上京し、江戸で始めて『聖武記』を読み、その「内地に学を設け、専ら夷書・夷史を訳し、敵情を瞭悉し、以て駕馭に補せんとする主張に共感したという。象山が紹介している魏源の主張は、上の「若し内地に亦館を粵東に設け、専ら夷書夷史を譯せば、則ち殊俗の敵情、虚実強弱、恩怨功取、曲折を瞭悉すれば、以て其の忌む所に中り、其の慕う所に投じ、駕馭において豈小補ならんや」に相当する。

但し、象山が外国書を読む必要性をさまざまな上書で繰り返し力説しているのに対し、魏源は素っ気ない。夷書・夷史を訳す事に言及しているのは、大部の『聖武記』の中で上述の箇所だけである。

しかも、外国書または、その翻訳書を読む対象として想定されている人々は魏源と佐久間象山とでは大きく異なっている。象山は、「下賤」の者も含めて「日本国民」が総体として敵情を知るべきであるという認識を持っていた。例えば、「海防に関する藩主宛上書」において次のように述べている。

外寇之義は国内の争乱とも相違仕、事勢に依り候ては、世界万国比類無之百代連綿とおはしまし候皇統の御安危にも預り候事にて、独り徳川家の御栄辱にのみ係り候義に無御座候へば、神州闔国の休戚をともし仕候事にて、生を此国に受け候ものは、貴賤尊卑を限らず、如何様とも憂念仕べき義と奉存候⁽²⁹⁾。

「和蘭語彙出版に関する老中阿部正弘宛書簡」においても、次のように論じている。

愚考仕候に、当今海寇備禦の策其完全を期し候には、世間広く彼の長短得失を知り、其状情を詳に候様仕度義と奉存候⁽³⁰⁾。

そもそも、外国語辞典を出版する試みは、「愚夫愚婦迄も」教化し、「国民」としての自覚を持たせるといふ壮大な展望の中に位置づけられていたのである。丸山真男は、佐久間象山の論理の特質を「世界と日本についての認識を国民化するということ」にあったと見ている⁽³¹⁾。象山の考えでは、支配階級のみでなく、庶民層も含めてイギリスを知り邦を守る気概を持つべきなのであり、彼は知能に勝れた日本人民にはそれが可能であると見ていた⁽³²⁾。

一方、魏源は、「下賤」の民をどのように見ていたであろうか。「兵を練り之をして勇有らしむるは難し。之をして方知らしむるは尤も難し⁽³³⁾。」とあるように、意識の高い兵士を得ることの困難さを語り、次のように続ける。

若し承平にして、自ら其地に戦はば、進死退生澳散して、節制無く、人をして自ら戦を為さしめんことは、韓白と雖も其れ能くせんや。況や大敵に臨み、大衆を用い、弩矢は風雨の如く、砲火は雷電の如く、生死は呼吸の間に在り、平時十分の技有る者も、陣に臨んでは、僅かに能く其四五分を用ゆるに過ぎず⁽³⁴⁾。

敵に遭遇して闘うことなく四散してしまう兵士たちは、アヘン戦争において普遍的に見られた現象であった。

この問題に対処するために、魏源は「驍悍の民」を召募して兵と為すことを提言している。

沿海の梟徒を以て、水師と為せば、水師は東南に敵無く、而して海賊は東南に患へず、中原の亡命を練て、陸営と為せば、西北に敵なく、而して土盗は西北に生せず、両利を収めて両害を祛く、是神明化裁の大人に在る哉⁽³⁵⁾。

海賊や盗賊をイギリスとの戦いの最前線に送るといふこの考え方は、危うさを内包している。彼等は、状況次第ではイギリス側につくことを躊躇しないであろう。魏源は「下賤」の者たちが「国民」としての自覚を持つことに全く期待していない。彼等は、魏源にとってあくまで利用の対象でしかない。「国民観」において、魏源と佐久間象山とは対極に立つと言ってもよい。

4. なぜ、共感したのか

以上に検討した如く、魏源と佐久間象山とは、西洋式軍備導入の必要性の主張、外国書を読み外国事情を知る必要性の主張、以上の二つの主張において確かに共通している。

しかし、共通する主張について考察を深めるとむしろ相違点が浮かび上がってくる。西洋式軍備導入の主張においては、佐久間象山は新式軍備の背後にある科学の重要性を認識し、新式軍備とともに科学技術を導入することを急務とみなしていた。魏源にはそのような認識はない。また、象山にとって、西洋式軍備の導入は「己を捨て人に従う」という覚悟が必要であった。華夷意識のとらえ直しが必要だったのである。しかし、魏源は「夷の長技を以て夷を防ぐ」と述べているように、あくまで華夷意識の枠内に導入を位置づけている。

また、外国書を読み外国事情を知る必要性の主張においては、外国書を読んで外国の事情を知るべきであると想定されている人々が異なる。佐久間象山は「愚婦愚夫」を含むすべての「国民」を想定していた。しかし魏源にそのような「国民」観を垣間見ることはできない。一見共通する主張の背後の思想、特に、科学に対する認識、華夷意識、「国民」観において決定的な相違がある。

魏源との間にこのように大きな思想の断絶があることを、佐久間象山は認識していたのだろうか。おそらく認識していたと私は考える。すでに紹介したように、象山は魏源が銃砲の構造に無知のまま銃砲を論じていることを深く嘆じている。また、直接魏源に向けた批判ではないが、中国の現状に対する批判は鋭い。

畢竟彼（イギリス --- 筆者）の学ぶ所は其要を得、是（中国 --- 筆者）の学ぶ所は其要を得ず、高遠空疎の談に溺れ、訓詁・考証の末に流れ候て、其間一、二有用の学に志し候ものありといへども、一体万物の窮理其実を失い候国風にて……

惟只顧己の国のみよき事に心得、外国といへばひたもの軽視候て、夷狄蛮貊と賤しめ、彼（イギリス --- 筆者）の實事に熟練し、国利をも興し、兵力をも盛んにし、火技に妙に、航海に巧みなる事、遙かに自国の上に出でたるを知らず居候⁽³⁶⁾。

中国に対して、その学問の現状と、華夷意識との二点において厳しい批判をしている。魏源は確かに西洋の戦艦や火器の導入を主張した点で「先覚者」であったかもしれないが、「万物の窮理」を追求しようとはせず、華夷意識の枠内に止まっていた。象山は、魏源の限界をわかっていたと思う。

それにもかかわらず、なぜ、佐久間象山は魏源に共感したのだろうか。「海外の同志」とまで呼んで熱い共感を寄せたのだろうか。「海外の同志」という言葉には、魏源の見解が部分的に自己と共通していることを発見したにとどまらない強い思い入れが感じられる。

佐久間象山は、世間に理解されない先覚者という点で、自己と魏源とは共通していると考えたのではないか。象山はやや自信過剰なところがあったようである。嘉永二年（1849）の「ハルマ出版に関する藩主宛上書」には、ハルマ辞書の出版に難色を示した松代藩家老に対して、「是等は眼もなく識もなく、羽毛の属にひとしきものどもに候」などと、激的な批判を並べている⁽³⁷⁾。さぞかし、扱いにくい部下であったろう。

また、『省譽録』は、獄中で考えたことを思い出して後に記したものであり、その始まりの部分には、弟子吉田松陰の密航を援助した廉で獄につながれた悔しさがにじみ出ている。

行ふところの道は、もつて自から安んずべし。得るところの事は、もつて自から楽しむべし。罪の有無は我にあるのみ。外より至るものは、あに憂戚するに足らんや。もし忠信にして譴を受くるをもって辱となさば、すなわち不義にして富みかつ貴きも、またその榮とするところにあるか⁽³⁸⁾。

自己の内面において何のやましきもないのだから、罪を受けたことは何ら恥じる事ではないという強烈な自尊心を表明しているが、行間には悔しさが漂っている。

一方、魏源の『聖武記』にも、旧例にこだわる官僚に対する苛立ちが随所に語られている。例えば、江南の漕糧を海運に転換する政策が無知な官僚の上奏によって沙汰やみとなったことについて、「乃ち利国利民の上策を以て妄りに謗りて病官病民の迂図と為す。大惑して解せざる者...なり」と憤懣をもらしている⁽³⁹⁾。軍備の充実に関して経費が無いという官僚に対しても、次のような批判をしている。

妄りに謂う。海防を整えんと欲するも、経費無きに苦しむと。眞に中国の財力は遠く外夷に譲るが如し。...国家、数百年の利弊を興さんと欲すれば、名実を総核するに在りて始める。名実を総核せんと欲せば、士大夫の楷書帖括を捨て、朝章を討ね、国故を討ねるに在りて始める。胥吏の例案を捨て、而して訐謗を図り、遠猷を図るに在りて始める⁽⁴⁰⁾。

佐久間象山が魏源を「海外の同志」と呼んで共感を表明したのは、共通する論点を主張していることも確かにあるであろうが、それ以上に、魏源の中に、世に受け入れられない先覚者という自己に共通する側面を発見したからではないだろうか。

おわりに

佐久間象山は『省譽録』の中で、一面識もない魏源に対して海を隔てて共感を寄せている。

ああ、予と魏とは、おのおの異域に生れ、姓名を相識らざるに、時に感じて言を著はすは同じくこの歳にありて、その見るところも、また闇号するものあるは、一に何ぞ奇なるや。眞に海外の同志といふべし。

この一節を初めて読んだ時、漠然とした違和感を感じた。『聖武記』は歴代清朝皇帝の軍功を記述した書物であり、「海防に関する藩主宛上書」とは性格を異にするのではないかと、思ったのである。象山や魏源の書いたものに接するにつれて、別の違和感が生まれた。魏源の西洋認識は佐久間象山のそれとは大きく異なっており、「海外の同志」などと言えるのだろうか、大袈裟ではないだろうか、という違和感である。

本稿では、長い間抱いていたそのような違和感について検討する作業を試みた。佐久間象山と魏源とは、確かに、西洋式軍備の導入の主張、外国書を読むことの必要性の主張において共通す

る。しかし、西洋の軍備の背後に科学が存在することについて、両者の認識は隔たっている。外国書を読む人々についても、佐久間象山は「下賤」の者を含む「国民」全体を想定しているが、魏源の場合、民衆は度外視されている。華夷思想においても、魏源はあくまで華夷思想の枠組みの中にとどまり、象山はそのとらえ直しに一步踏み出している。両者は、むしろ相違が顕著である。しかも、象山は自分の思想と魏源のそれとの異質性を認識していたと思われる。

それでは、佐久間象山の魏源への熱い共感は何のように理解すればよいのだろうか。象山は、周囲に抜きん出た自己の才能が周辺や上司に正当に評価されていないという不満を抱いていたようである。おそらく、そこに、魏源と共通する要素を見出したのではないか。象山の認識においては、彼と魏源とは世の中に受け入れられない先覚者なのであり、彼はそうした意味において魏源を「海外の同志」と呼んだ、と私は解釈する。

註

- (1) 『日本思想体系55 渡邊華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』岩波書店、1971年、p.251。
- (2) 佐久間象山が、魏源を「海外の同志」と呼んでいることについては、すでに先行研究によって言及されている。例えば、王晓秋「19世紀中叶的中日文化交流」(山田辰雄編『日中関係の150年』東方書店、1994年、p.16)、日本の研究では、山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、2001年、p.162、など。
- (3) 大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967年。なお、『海国図志』が初めて日本にもたらされたのは嘉永四年(1851)である(森睦彦『『海国図志』の舶載から翻刻まで』『蘭学資料研究会研究報告』206号、p.56)。
- (4) 塩谷宕陰「翻采海国図志序」『海国図志』(嘉永七年安政二・三年江戸須原屋伊八等刊本)。なお、訓下し文は、田中彰・宮地正人編『歴史認識 日本近代思想体系』岩波書店、1991年、p.16を参照した。
- (5) 神田信夫「『聖武記』雑考」『東方学会創立四十周年記念東方学論集』東方学会、1987年、pp.334-337頁。
- (6) 同上、p.338。及び、『魏源全集』(岳麓書舎、2001年)第三冊所収『聖武記』の「校点説明」。
- (7) 道光二十二年序刊本は『近代中国史料叢刊』所収。二十六年第三次重訂本は、『魏源全集』所収。和訳本は興亜院政務部譯、東京生活社、1943年(なお、以下、本書は和訳本と略称する)。
- (8) 『聖武記』巻十四、二十四葉の裏~二十五葉表。和訳本 pp.687-688。
- (9) 同上書、巻十四、二十葉の裏。和訳本 p.682。
- (10) 前掲『日本思想体系55』p.265。
- (11) 同上。
- (12) 同上書p.269。
- (13) イギリスの「横暴」に対抗する手段として中国は「閉關籠市」のみを有していたことについては、坂野正高『近代中国政治外交史』東京大学出版会、1973年、pp.136-137。
- (14) 『聖武記』巻十四、二十四葉の表裏。和訳本 p.687。
- (15) 『聖武記』巻八、七葉の表。和訳本 p.414。
- (16) 前掲『日本思想体系55』p.251。
- (17) 『聖武記』巻十四、十五葉の表。和訳本 p.675。

- (18) 同上、二十一葉裏～二十二葉表。和訳本 pp.683-684。
- (19) 同上。
- (20) 同上、二十二葉表裏。和訳本 p.684。
- (21) 前掲『日本思想体系55』p.271。
- (22) 同上。
- (23) 同上書、p.272。
- (24) 王家俊氏は、『海国図志』「籌海篇」の一部を引用して魏源には戦艦を製造する意図があったと論じているが、引用されている部分からそれを言うことは不可能である(『魏源對西方的認識及其海防思想』(大立出版社、1984年、p.77)。
- (25) 前掲『日本思想体系55』p.252。
- (26) 省譽録に「詳証術は万学の基本なり。泰西この術を發明し、兵略もまた大いに進み、曩然として往時とは別なり」という有名な一節がある(同上書、p.248)。なお、丸山真男は佐久間象山の科学的・客観的にものごとに接近する視座を高く評価し、それこそが詳証術であると主張している(丸山真男「幕末における視座の変革」『展望』1965年5月号。後に同『忠誠と反逆』筑摩書房、1992年に収録)。
- (27) 『聖武記』巻十二、九葉裏。和訳本 p.620。
- (28) 前掲『日本思想体系55』pp.251-252。
- (29) 同上書、p.266。
- (30) 同上書、p.290。
- (31) 丸山真男『忠誠と反逆』所収論文、p.120。「愚夫愚婦迄も、忠孝節義を弁へ候様」教化すべきであるという象山の主張は、前掲『日本思想体系55』p.269。
- (32) 佐久間象山は、日本の「人民の知能」は世界に優れていると自負していた(前掲『日本思想体系55』p.278)。
- (33) 『聖武記』巻十四、二十七葉裏。和訳本 p.691。
- (34) 同上、二十八葉表。同上。
- (35) 同上、二十六葉裏。和訳本 p.689。
- (36) 「ハルマ出版に関する藩主宛上書」(前掲『日本思想体系55』p.284)。
- (37) 同上書、p.287。
- (38) 前掲『日本思想体系55』p.239。
- (39) 『聖武記』巻十一、二十三葉の表裏。和訳本 p.605。当時、漕糧をめぐる腐敗は甚しいものであった。魏源は道光四(1824)年以來、海運を主張し続けていた。海運は道光二十八(1848)年以降ようやく実施されることになった。
- (40) 同上。同上書、p.609。